

---

# 未来へ

亜紅亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来へ

### 【コード】

N3008Y

### 【作者名】

亜紅亜

### 【あらすじ】

組織との対決も終え、無事に復学した新一。  
その新一の身に異変が・・・

## 二話

それは突然だった。

いつものように寝坊して、蘭が起こしに来て……学校へ行って茶化されて。

そんな日常がこれからも続いていくのだと思っていた。

でも

そんな時でも、俺の未来は音を立ててガラガラと崩れていったんだ。

～体育中～

今日は俺の得意なサッカーだ。

いつもは楽しくてしょうがないけれど、今日は何かが違う。

体全体がだるいのか、一歩踏み出すのがすごく疲れる。

軽い眩暈までしてきた。

(こりゃ～昨日遅くまで小説読んでたからか……ははは)

そう。昨日は優作の新刊の発売日であった。  
一度読み出したらとまらなくなってしまい、寝たのは今日の4時である。

(でもおかしいな……。いつもは寝てなくてもサッカーやってたんだけどなあ……)

なんてことをのんきに考えながら居るとどこからか鋭い声が聞こえてきた。

「工藤！……後ろ！……！」

「え？」

サッカーボールだ。

誰かが変な方向に飛ばしちまったのか、と思いながらとめようと体を動かし

動かなかった

そして意外に威力の入ったボールが新一の後頭部に直撃した。  
そして俺はそのまま、崩れ落ちた。

「工藤!!!?!?!」

「つてええ〜」  
崩れ落ち方が派手だった分、心配も大きかったが本人は普通に起き上がる。

「……なんだよ。大丈夫そうじゃんか」  
新一の様子を見て安心したようだ。

「でも珍しいよな。工藤がボール受け損なうなんて。  
いつも難なくやってんのによ」

「あ……ああ。」

「そうなんだよな〜。今日はなんだかつ?!」  
その時だ。

右のこめかみから、左のこめかみへ激痛が走った。

「く……工藤?」

「くっ……っ……う」

その間も激痛が走っていた。

(・・・なんだ？この痛み・・・。唯の頭痛じゃないみたいだ・・・)

「おい！中道！職員室に行つて救急車を呼んできてもらつてくれ！」  
あまりにも痛がる新一をみて、教師が指示したのだ。

「おい！しっかりしろ！」

「救急車呼んだからな！」

「工藤！」

そんな声を聞きながら、新一の瞼は閉じられていった。

## 二話（後書き）

．．．．すいません！文章構成下手ですみません！！！！  
頭の中ではこのとーりに新一たちが動いてるんですけどね．．．．  
^：^

いつも頭の中は「ミニ・劇場」ですねw  
そのまま文章に出来たらいいのに．．．．  
文字にするって難しいですね><

コメントお願いします

## 一話

神様は不平等だ。

だって新一は世のために命をかけて巨大な組織と戦ったんだよ？  
何日も生死の境を行ったりきたりして……

それにいつだって事件を解いてる。

一年前、居なくなる前は遊び半分なおこるもあった。  
でも今は違う。

どんなに小さな事件でも大きな事件でも、ことの大きさは一緒だつて。

命の重さに変わりはないって。

言ってたんだよ？

それに、いつも私を気遣ってくれる。

優しい言葉、かけてくれる。

ちよつとしたことにも気がついて……

神様お願い



新—を奪わないで

## 一話（後書き）

初連載小説です！

文章も下手ですし、意味不明なところのほづが多いかもしれません

^^;

ですが温かい目で読んでくださると嬉しいです^^

### 三話（前書き）

・・・一話と二話逆になってしまいました><  
申し訳ありません・・・：  
読みにくいかもしれませんが耐えてください！え

## 三話

シンイチガタオレテレビヨウインニハンソウサレタ？

・・・嘘だ

サッカーなんてあいつの得意科目じゃない  
それなのにどうして・・・？

そんな考えを巡らせながら私は学校を飛び出していた

（数十分前）

科目は保健体育

男子はサッカー

女子は保健だった

蘭たちは教室を移動していた

たわいもない話をしながら

「そうそう、蘭。駅前に評判のいいクレープ屋が出来たのよ！  
学校帰りにでも行かない？」

「園子って情報が早いんだから。」

うーん今日は無理かも……。新一の家寄らなきゃいけないし」

「そっかー残念」

なんて話しているときだった

「え？救急車？」

「誰が運ばれたの?!」

「校庭で男子だから・・・うちのクラスじゃん!!!」

「えーマジ?!」

そんな会話が耳に入った

え？運ばれた？

でも今日はあまり日が出てないから熱中症はない  
風邪気味や体調が悪そうなのはいなか・・・った・・・？

そのとき朝のことがよみがえった

だるそうにしてた

無理に笑っていた

もしかしたら・・・新一が？

そのとき、一番聞きたくない言葉が、耳に入った

「工藤君が倒れて病院に搬送された」

### 三話（後書き）

・・・さてさて

次話は病院でのことです！

勘の良い方は気付くかには・・・？  
W

## 四話

気付いたときには病院に居た

あの時そのまま学校を飛び出し、走ってきたみたいだ

通りかかった看護師に声をかけ、連れて行ってもらった

工藤新一様

病室につけられた名前が新一が居ることを示している

「新一・・・起きてるかな」

そつつぶやいてドアに手をかけた

ガララ・・・

「新一？起きてる？」

「？蘭。学校じゃねーのか??」

新一は点滴をしているだけだった

「・・・結構元気そうじゃない。運ばれたって言うからもっと重症かと思った・・・」



「ああ、睡眠不足と栄養不足と脱水症状とからしいからな」

「え？睡眠不足は分かるけど・・・栄養不足って」

その瞬間新一は顔を引きつらせた

「え・・・いや・・・ほら！最近事件があつたから！そのまま寝ちやつたりとかー」

「寝ちやつたりとかーじゃないわよ！人がどれだけ心配したと思つてんの?!?!?!」

そのままいい合いが続いたが、最後はふたりで笑いあつた

そのときは二人とも知らなかつたのだ

薄いドアの前に、  
真実を告げるものが居る事を

#### 四話（後書き）

お久しぶりです（””）

期末テストの関係でなかなか更新できませんでした  
もーテストの馬鹿（ノ、ノ）（呪）

## 五話

ガラガラ

医「ああ工藤君。お友達かね？」

すまんが検査結果と今後について話したいのだが……」

蘭「今後って……。」

新一、そんなに悪いんですか?!」

医者の意味ありげな言葉に、蘭は不安を覚えた

医「なあに。心配は要らないよ。」

ただ少し説教をするだけだね……。栄養不足なんかでまた来られちゃたまないから」

新「ははは……すみません

ってことで蘭。もう帰って良いぞ。心配かけたな……。」

蘭「ううん。」

でも検査結果。教えてよね!

じゃあバイバイ!」

ガラガラ……

新「……で？」

医「では？」

新「唯の説教なんかではないんでしょう？」

僕達の話も外で聞いていたみたいだし？」

医「はは……さすが高校生探偵。

敵わないな」

新「誤魔化さないでください」

新一の目はもう笑っていないかった

その目は医者を見据えていた

医「では単刀直入に言おう」



「君の目は失明する可能性がある」

目の前が真っ暗になった



## 五話（後書き）

・・・はい

意味不明ですね。（、、1111）

わかってます！^^^；

その理由も変ですが、温かい目をお願いします（、、\*）（、  
\*）（、、\*）（、\*）

## 六話（前書き）

矛盾している点もあるかもしれませんがお許しください。  
（、、  
1111）

## 六話

「キミノメハシツメイスルカノウセイガアル

新「その・・・可能性とは？」

もう何がなんだか分からなかった

ただ、平静を装おうとしている自分がいることしか

医「君はA P O T X 4 8 6 9を飲んだことがあるね。

その成分が今になって脳細胞を破壊し始めているんだよ」

新「脳細胞を・・・破壊・・・？」

何故今になって

解毒剤は完璧だったんではないのか

医「その破壊のせいで目につながっている大事な神経が傷つけられるかもしれないんだ」

新「その可能性を下げる方法などは無いんですか」

あつて欲しい

少しの希望をかけて聞いた

医「残念だが・・・」。

今の医療では不可能だ」

ひゅっ

開いていた窓から風が吹いた  
まるで俺の頭を抜けるように  
それほど何も考えられなかった

考えたくなかった

もう、何も見えなくなる

もう、蘭の笑顔を見られない

もう、景色も小説も園子も両親も、サッカー中継、暗号なにもかも

大好きな蘭さえ

二度と見ることは許されなくなる

そんなこと



ソ  
ン  
ナ  
コ  
ト  
ラ  
ン  
ニ  
ハ  
ナ  
セ  
ナ  
イ

六話（後書き）

脳細胞破壊で失明って・・・無いですよね（||。||（））

すいません

医療知識ZEROなんで^^^:



## 七話

医者が出ていた俺の病室には、開いた窓から夕焼けの光が差し込んでいた

その光に当たりながら、俺の頭の中は医者のことやリフレインしていた

「君の目は失明する可能性がある

「今の段階で治療法はない

「ただ、治療法が見つかるまで通院しながら生活してもらってもいい  
「親御さんや、大切な人に・・・話しておきなさい

「ハハ・・・」

俺の乾いた声が病室にこだました

「なんで

「ちくしょう・・・」

「なんで・・・

「ちくしょう・・・」

「なんで・・・!!!!!

「ちくしょおおお!!!!!!!!」

何故、また蘭を悲しめる。苦しめる。  
何故、また縛り付ける。もう開放してやってもいいじゃないのか！  
それに……

何故、灰原をまた孤独に追いやる

あいつは優しい

だから、自分のせいにして知らぬ間に自分を追い詰め苦しめる  
そして、知らずに孤独のふちに立っている

こんなこと、どう伝えるって言っただ

母さんだって、父さんだって、迷惑をかける

蘭も重いものを持たせてしまう

灰原を孤独に追いやってしまう

クラスの皆にも、心配をかける

それに、俺の頭にボールあてたの……後藤だっけな

今、すっげービクビクしてんのかなー……

わりいことしたな

あ  
・  
・  
・  
・

俺、逃げてんのかな

真実から目をそらそうとしてる

だめだな・・・探偵なのに

探偵・・・？

服部にも言わなきゃ・・・



コ  
ン  
コ  
ン

病室のドアが叩かれた

「どろろ」

誰だ？





「工藤！大丈夫かー？」

「ごめんな、工藤君。いきなり来てもーて」

「新一、あのね事務所に来ててお見舞い行ってくって言うてから・・・  
つれてきちゃった」

俺、  
今

最悪

「新  
—  
·  
·  
·  
·  
?」

どんな顔してんのかな

「おい、工藤。顔真っ青やぞ？どうしたんか？」



ー  
ど  
じ  
も  
し  
ね  
え  
よ

そう、笑って返したかった

でも、もうそれは許されない

## 八話

「なんでも・・・ねえよ」

笑って言いたかった

こんな、無理やりの引きつった笑顔じゃなくて

「あほ抜かせ！そんな青い顔しとって大丈夫なわけあらへんがな！」

「新一、どうかしたの？気持ち悪い？」

どうしよう

こいつらにもう話してしまおうか

きつと受け入れて、一番に気にかけてくれるかもしれない

でも

いつも通り、笑い合う事は出来ない

いつも通りの関係には戻れない

俺の事で無駄に気を使わせる

そんなのは絶対に嫌だ

俺の事で無理に笑う姿なんて見たくない



だから――

「なんでもねえって  
寒くなってきたから。そんだけ」

俺は無理にでも笑う  
嘘をつく

「ほんまかあ？

寒いっていうより、青白いって感じやけど・・・」

・・・なんでこいつ、来たんだよ。ばれちまうじゃねーか

「工藤君がなんでもないゆうんならええんちゃう？  
問い詰めることもないやろ」

「そうだね。新一、本当になんでもないんだよね？」

「ああ。心配すんな！」

そう言いながらもこめかみに鋭い物で刺されるような激痛が走った  
思わず顔をしかめた

「・・・俺は納得せえへんのやけど・・・  
まあええか」

(今度しつこく問い詰めてやる・・・覚悟しとけやあ)

平次の周りに漂うオーラに3人は引いていた

「へ・・・平次？どうかしたん？」

「ん？なーんもせえへんよ。」

あつ！そーいえばのどか沸いてきたなー。ねーちゃんと和葉で買  
つてきてくれんか？」

和葉達は飲み物を買いに病室を出て行った

「もうええで」

「？何が」

「強がんな。ポケエ。頭、痛いんやろ。我慢してんのばればれやで」

「……やっぱばれてたか……。」

「ばればれやで。」

「……なにもきかねーのか」

「聞いても答えんやろ」

「は……流石だな」

「……でも一つだけ聞いておくわ。」

「お前、病気なんか？」

「おじいちゃん」

「・・・さよけ。」

俺先帰つとくわ、和葉たちにもそーいっといてや」

「ああ。悪かったな」

プロ  
シヤ  
ッ

病室のドアを閉める音。  
服部が出て行く音がした





、違つ、と言つた声  
自分でもビックリするぐらい、  
かすかに

震えていた

服部は気付いてんだろうな



俺が退院するまで、あと2日

八話（後書き）

関西弁、難しいですねー。  
（、、一一一）

## 九話

あっという間に2日間が過ぎ、退院の日

「じゃあ、週に1度の通院は忘れずに。どうしても来られない日が出来たら連絡をしてくれよ」

「はい。ありがとうございます」

医師との軽い会話を済ませ、急ぎ足で病院を出た。

すぐに外の空気を吸いたかった  
大きな空を見たかった

「  
っ」

見えたのは雲ひとつ無い青空  
その青は怒り、欲望、殺人などと俺の中にあるものが含まれていないような青だった

俺は一体いつまでこの空を見られるのだろうか

一年？三年？もっと短いかもしれない

思わず熱いものがこみ上げてきた  
そのとき

「新一〜〜〜！」

振り向いたら蘭がいた  
しかも服部を連れて

「・・・おねーらどうしたんだよ  
学校は？」

「やだ、新一。  
もう冬休みよ？昨日から」

「あ・・・」

俺のいない間にもう冬休みになっていたのだ  
クラスに顔も出せないで終わったな

「蘭は分かったけど・・・服部と和葉ちゃんは？」

「一昨日帰って昨日夕方に来たの」

あいた口がふさがらなかった

「ちゅーわけや。工藤。今日とめてやー」

「は?? 蘭の家じゃないのか?」

「あほ抜かせ。毛利のねーちゃんに悪いやろ。」

それにお前に聞きたいこともぎょーさんあんねや」

「・・・まあーいいけどよ」

話しながら帰っているうちに工藤低についた  
俺は安心したのか鍵を開けると

眩暈を起こし

その場にうずくまった

幸い蘭や和葉ちゃんは別れた後だった

「工藤?! 大丈夫か?!」



「っ…ああ。わりいな」

もうこいつには嘘は通じない  
そう思うと同時に話す覚悟を決めた

「…全部、話すよ」

平時の顔が引き締まったように見えた

「ああ…」

ソファーについた途端、俺は意識を失い眠りについた  
起きたときはきつと夜中だろう  
夜中でも平次は起きているだろう

تونس

長い夜が始まる

九話（後書き）

最後のせりふ、入れたかったただけです¥¥¥¥¥¥¥¥あは

## 十話

「な・・・んやて」

服部の驚いた声が木霊した

意識を失ってから、2時間ほどして目を覚ましたら前に服部がいた  
それから俺の身に起きる事を話した

「そんなの・・・嘘やろ」

「嘘じゃねえよ」

ほら、余計な心配をさせ困惑させる

やっぱり言わないほうが良かったのだ

などと思ったとき

「工藤。苦しかったやろ・・・」

「?!」

「そないな事一人で抱えてたんや。辛いやろ

それにお前は、こんなこと話さないほうが良いんじゃないか、と  
か考えてるんやろうしな!」

「うっせ」

「まあ、ちいとびっくりしたけど、100%治らんわけやないんや  
ろ?」

「だつたら大丈夫や！」

「……ああ。服部はこういう奴だったな  
どんな最悪な状況でも、どんなに汚れているところでもいいところ  
を見つけそれをさらに輝かせる

すごい奴だな

こんな奴が俺の傍にいたのに、今まで気付かなかった

「……そういうことが」

「なにがや？」

きつと蘭も、服部と同じなんだ

少しの可能性を信じて待つていてくれる

コナンのとき、なんだかんだ言っても待つていてくれたのは俺を信  
じてくれてたんだよな

「……いまさらになって改めて分かるって、笑えるよな

俺の周りの奴は……皆強い

強くて頼れる

ありがたいな

「オメーらは強いな」

「あん？なにがや、剣道かー？」

「ちげーよ……まあそれもだけど」

「明日、灰原にも言いに行くよ。博士にも」

「え」

「着いてきてくれるか？」

「ああ」





俺は工藤の強い眼差しに目を逸らしそうになった

今までは工藤が俺たちに目を合わせなかったのに

今度は俺か・・・

あのちっこいねーちゃんはどう思うやろか

びっくりするやろか

工藤もそれ承知やろうに・・・

それも受け止める強さがあんねや

工藤

俺らより、お前のほうが強いぞ

十話（後書き）

あ（＊＾　　＾＊）

最後意味ぷーちゃん。・＊・（。○。○）  
　　||　　、　　、　　＊（○

## 十一話

「……じゃ、行くか」

「おう」

新一の声を合図として二人は阿笠邸へと足を踏み入れた

「おい博士」

「じゃますんでー」

「……あなた達チャイムも押さずに勝手に入ってくるの止めなさいよ」

「ああわりいわりい。それより灰原、時間あつか？」

「構わないけど……なに？恋愛相談ならお断りよ」

「んなことじゃねーよ。出来れば……博士も一緒に」

「……分かったわ。座って待ってて。お茶でも入れてくるわ」

灰原は何かを察したように新一らを座るよう促した

(彼、何かを決意したような感じだった。蘭さん関係でもない。じやあ……もしかして……)

灰原は一つの最悪な可能性を思い、お茶を入れる手がかすかに震えだした

(そんな……まさか)

お茶を持っていくと博士も来ていた

「なんじゃ？話って」

「ああ……ちょっと伝えなきゃならないことがあってよ」

「伝えなきゃならんこと？」

「ああ」

「俺は

失明するかもしれない」

二人、灰原と博士は目を見開き驚いていた  
服部はたとえ一度聞いたとしても、理解していたとしても再び事実  
を耳にし、苦痛な顔をしていた

少しの沈黙があった

「どういう……ことなの」

その沈黙を破ったのは灰原だった

「どういうことも、何もねえよ。俺は失明するかもしれない。そん  
だけ」

「そんだけって!!!!あなた自分の状況分かってるの?!?!」

「ああ」

「つ……。どうせAPOTXN4869の解毒剤のせいでしょう？」

「ああ。脳細胞が破壊されてるらしい。その破壊で目へつながらる神  
経を傷つけてるみてーだ」



「・・・なさいよ」

「え？」

「私を責めなさいよ！あんな毒薬を作った張本人なのよ？！あんな薬さえなければあなたはこんな思いなんて・・・！私に会うことも無く、平和に今まで通りに暮らせてたのに！！！」

何故。彼は穏やかな目をしてるの？

まるで死期をまつ老人みたいに

私が憎くないの？恨んでないの？

蘭さんとの時間も奪った、勝手に、死んだ、とか言われて・・・

そんな時を作ったのも私なのにー・・・

「灰原！！！！」

「！」

工藤君の大きな声

私の叫びを一瞬で制した

「ああ、俺はお前が憎かった。腹が立って腹が立ってしょうがなかった」

ほら、どんなに外見を装っても内心は私に対する怒りでー

「でも、今は違う」

「・・・え？」

「お前がああ薬を作ってくれたおかげで俺は生きてる。薬が無かつたら俺は拳銃でも殺されてかかも しんねーしな」

へへっと工藤君は笑った

「それに俺が縮まなかつたら歩美達にも会えなかつたしな！」

「コナンになって俺は成長した。人間としても、探偵としても」

「おめーがいてくれてよかったよ」

「おめーの作った薬で俺は助かったんだ」

「ありがとな」

なんで彼は・・・

こんなに優しい言葉をかけてくれるの・・・？

私は・・・彼の人生を狂わせたのに

「ありがとう」

この言葉を工藤君は私に言ってくれた

こんな真っ黒な私に

「っ……っ……！う……くっ……」

私は泣いた

この涙は悲しみなのか、嬉しさなのか分からない

でも涙を流していくうちに心が軽く

今まで溜め込んでいた黒いものが出て行く気がした

「頼まれなくても私からお願いするわよ。嫌がっても止めてあげないんだから……」

3人（こ…怖っ！…！）

「工藤良かつたなぐちっこいねーちゃん。頼み聞いてくれて」

「…良くねえよ」

「は？」

「蘭たち。どーすっかな」

「あ…なるほど」

「ま。明日考えるか。今日はもう寝る」

「せやな」

二人の影は工藤邸に消えていった

十一話(後書き)

っは~~~~~。。。。。- y ) > 。 ( > ) 。 〇〇

コメントお願いします ^ ^

## 十二話

トントントン

「なあ…服部。眠れたか」

「いや。熟睡できんかったわ」

「やっぱり言えねえよ。…失明するかも、なんてな」

「ほんまや」

そう話しながら階段を下りてきたのは平次と新一だ  
今は朝の8時、起きて来て朝食でも食べようかと…

「ねえ…どじいじいこと…」

「ちゃんと説明しいよ」

いるはずの無い人の声があった  
ここにいるはずが無い  
そう自分に言った。でも

そこにいるのは

蘭と和葉だ

「なんでここに…」

「工藤君と平次だけじゃどうせちゃんとしたもの食べへんからって、蘭ちゃんが朝ごはん作りに来てくれたんよ！」

和葉はなぜか怒り口調だ

「って和葉。お前なに怒ってんねん」

「当たり前やる！理由はわからへんけど、そないな大切なこと蘭ちゃんに黙ってたん？！

おかしいやる！」

「和葉！工藤はな」もういいよ。服部」

新一が平次の言葉を制した

その顔は何かをあきらめたような、決意したような顔だった

「…説明するよ。少し長くなるけど」

蘭と和葉はうなずいた

新一はすべて話した

医師に話されたこと、すべて

二人は困惑していた

その後平次が気を利かせてか、和葉を連れて出て行った

「見えなくなるの？」

「…ああ」



「ばか」

「え？」

「ばかばかばかばかばか！！！！  
治る可能性もあるって言ったじゃない！  
なんで治るって言うてくれないの！なんで新一がその可能性を信じないの？！」

「その可能性だって、低いんだぜ？  
それを…どう信じろって言うんだよ」

新一が出した笑みは自虐的な笑みだった

「もう…なにもかも限界なんだよっ…！」

そついい新一の頬をつたつたのは涙だった

人前で涙を見せなかった新一が、初めてみせた涙だった

## 十三話（前書き）

新一泣きましたね（――；）  
泣き新一・コナン好きなんですよ（><y  
クール…でもわぁ 見たいなwww

## 十三話

「し…んいち…？」

「っわっわりい…ちよつとな、ごみ入っただけだから…」

嘘だ

そんなのは嘘だった

いつも頑張ってポーカーフェイスを保っていたけど、もう限界だった

この涙は本心だ

泣きたかった

泣いて、その涙と一緒に心の蟠りも流れ出ていくような気がして…

服部がいたから泣かないようにしていたけど…

なんで一番見せたくない奴に、見られちまうんだろうな

きつと自分のことのように心配して抱え込むのに…

こんな甘えちゃいけないのに

「へたくそだなあ」

「は？」

「泣いた言い訳。へたくそ！」

「いや、いいわけも何も……」

「甘えていいのに。寄りかかって欲しいのに。」

新一は全部一人で背負い込んだじゃうからなあー」

「……そうしたらおめーは苦しむじゃねーか

泣くじゃねーか……。そんな姿はもう見たくないんだよ……！！

俺のことなんかで苦しんで、泣いて、傷ついて……もう、同じ過ちは  
しないって決めたのに……！！」

「話してくれないほうが苦しかった」

その言葉に新一は下を向いていた顔を蘭に向けた

「新一、自覚してた？」

あんた何か隠し事あると、無理にポーカークォフェイスだからすぐ分かるのよ？」

「あ……」

「それに、今度は一人じゃないもん」

「一人じゃない…?」

「コナン君になったときは心細い感じがしたけど、今は新一、ちゃんというじゃない」

「…」

「それに服部君だって、和葉ちゃんだって。あたしは平気だよ?」

「失明したらどうすんだよ」

新一にとって一番恐れていたことだった

「そしたらあたしが新一の目になる」

「もつ心配要らないから…笑って？」

「新一がどうなってもあたしは新一から離れないから！」

そういうと蘭はひまわりのように笑った

それにつられて、俺も、笑った



## 十四話（前書き）

今回は新一と蘭を置いてどこかへ行った平次たちのお話です  
> < y )

## 十四話

「ちょっとはなしいや!」

和葉の手は平次に強くつかまれ、引っ張られたので少し赤くなっている

「なんで連れ出したん? あたし、工藤君に言いたいことあんのやけど」

「なにを言っんや」

「そんなの、蘭ちゃんに隠してたことに決まってるやんか!」  
「コナン君の時はしゃあないとして、今回は言えたやろ!!!」

「...お前は何も分かってへんのや」

急に平次の声のトーンが低くなった  
さすがの和葉も口を閉じた

「工藤は理由も無しにあのねーちゃんに隠し事なんてせえへん。それはお前もよく分かってるやろ」

和葉は本当のことで何も言えなかった

「工藤は苦しんどった。隠し事もしたくないし、でも言わないわけにはいかない

あのねーちゃんが好きやから…よけい、言えんかったんや」

「…そんなくらい、分かってたよ」

和葉の目からは涙が出た

「そんなん…とつくに分かってたよ。工藤君は平次と違って蘭ちゃんのこと、本当に大切にしているから。余計つらいのも…分かってたよ…！」

平次は複雑な気持ちだった

和葉が素直になっているのはいい

でも

、工藤君と違って、ってなんやねん！

俺はお前のこと大切にしていって言いたいんか！！！！

と、言いたかったが飲み込んで我慢我慢…と言い聞かせ

「ほならなんであんなおこっとなんや？」

「っだつて…工藤君との会話聞いたとき、蘭ちゃんすっごくシヨック受けたような顔しててん。

なのに…笑顔で、無理に作った笑顔で、大丈夫、っていったんやで？あんな蘭ちゃんの顔なんて、うち…もう見たくないねん！！！！」

「んなの工藤も一緒や！！」

「…もう涙全部出たか？」

「うん！すっきりした！！」

「ほんなら工藤ん家戻ろっか！」

そうして、新一の家のドアの前  
ノブに手を伸ばした瞬間聞こえてきたのは

新一の泣き

平次と和葉は息を呑んだ  
あの新一が泣くなんて

悪いと思いつつながらドアに耳をくつつけ聞いていた  
新一の本音も、なにもかも聞こえてしまった  
今すぐ入って、無理すんな！、などと声をかけたかった

でも

その必要は無い



すぐに二人の笑い声が聞こえたのだから――――

十四話（後書き）

コメントをお願いします）”  
（”

## 十五話

蘭たちに本当のことを話してからはとても気が楽になった  
隠し事もせずに、蘭もいつも通り接してくれている

……表面上では

きつと蘭は無理している

少しだけでも。でも

蘭が笑っているから、話さないから俺は聞かない  
無理に話しても蘭が苦しいだけだから

そう

笑い合って

いつもどおりに生活して

蘭の作ったご飯を食べて

もうなにも無かったように思えてきた

失明なんてーっ忘れていた

しかし

現実に引き戻された

書齋で学校から出された課題でもやるうと思った  
ドアを開け、足を無味だした瞬間――――

目の前が一瞬真っ暗になった

治まり、足元を見たら、'ヤバイ'と感じた

なぜが

足の下にはおきっぱなしの本  
出した足を止められる訳も無く、見事に転んだ

「いってー…」

一瞬目の前が暗くなったのは、進行しているからだと分かる  
しかし、転んで頭をぶつけた時の暗くなったのは何なんだ

転び、寝そべった体勢になっているのも気にせず考えた

たどり着いた先は

「あ。転んで頭ぶつけたからだ」

名探偵もたまにはぼけるのである



定期健診で病院へ訪れた新一は目の前が暗くなったのが悪い方向へ  
進んでいることを知る

もう本当の悪い方向へ



十五話（後書き）

次回は哀登場です！！！！／＼。、。（）ノ

## 十六話

カチカチカチ……

ある家の地下室では一人の少女が休むことなくパソコンのキーを叩いていた

その見た目からは想像も出来ない、難しい資料を見ながら

（早くしなきゃ…工藤君が…）

一心不乱にキーを叩いていた哀。

博士がそんな哀を気遣い、あつたかいココアを持って部屋に入ってきたのも気付かなかった

「哀くん」

「！…！…博士」

「そんなに頑張っていたら体がもたんぞ？」

「私はいいのよ…。それより工藤君を…」「哀くん！…！」

哀は博士に言葉を遮られた

「哀くんはもう、わしの娘のようじゃと思っている。

娘同然の哀くんが毎日、こもりっぱなしでいると心配するに決まっ  
ておるじゃらじつ?」

「むす…め…?」

「そうじゃ。新一も、そんなになるまで哀くんに頼もつとは思って  
らんとおもつぞ?」

哀は博士の言葉に心をうたれた

いつも心のどこかで自分は必要ないんじゃ、と考えていた

それなのに、こんなに大切な人から言って欲しかった言葉を貰った

こんなに嬉しいことは無い

「…わかったわ。もう無理はやめる」

「哀くん！」

「でも、今日は少し無理をするわ」

「え？」

「今、一つの可能性を思いついたわ。もしかしたら…いけるかも」

## 十七話

「…暇だ」

洋館に響いた声の主はソファに座っている工藤新一

今は朝の8時。新一にしては珍しくの早起きだ

いつもならば蘭が起こしに来なければいつまでも寝ていられる  
しかし今日は熟睡でき、蘭が来なくても起きられたのだ

（蘭が来るのは夕飯を作るために夕方。今日は検診だけどその検診  
は午後1時。今は8時だから…）

「…5時間もあんじゃねえか」

検診に遅れないように推理小説は読むことは避けたい。寝ようにも  
今日は眠れない…。熟睡したから

「暇だあああああ！」

。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。  
。 。

あれから暇だ暇だと言いながら4時間を過ごし、今は検診に行くため外に出ている  
本屋に寄ろうと思い、少し早く出たのだ

(…こんなに太陽が出てちゃ歩きながらも寝そっただぜ…)

ぼやっと考えながら歩いていると信号待ちになった  
ポケットに手を入れたまま信号を待つ

そのときだ

周りに変化がおきた  
ざわざわと人々が騒ぐ  
その視線の先には一台の車。運転手は眠っている

## 居眠り運転

いつもの新一ならいち早く異変に気付き、周りの人々を避難させるであろう

しかし

今の新一にはそれが出来なかった  
前触れも無く襲ってくる目の前が真っ暗になる症状。日差しによる  
眠気

最悪の状況だった



周囲の人があせり始める

何故、あの人は動かないのか

早く。早くこっちに来ないと、轢かれてしまう！

その思いが届いたのか新一も状況を理解した

しかし、遅かった



目に映ったのは新一が車に撥ね飛ばされ地面に叩きつけられる光景  
だった

十七話（後書き）

久しぶりの更新です（\*^ ^\*）

風邪引きました><：



んが居眠り運転の車にはねられ重症です。意識もなく、危ない状態との情報も入っています」「

「え…」

「うそ…！新一君が？」

「新一が…事故？」

「ら…蘭。新一君なら大丈夫よ。きっとそんなに怪我も思っほどひどくないんじゃない？」

「違うの」

顔を青ざめ、蘭が言った

「新一が重症なのは心配だけど…きっと新一なら大丈夫。でも、いつも周りの変化にいち早く気付く新一が、車に気付かなかった…。そんなになるまで悪化してるのかも…」

「！」

園子は息を呑んだ  
言われて見れば確かにそうだ。あの新一が気付かなかった…  
そんなこと……

動くことも出来ないくらいに動揺した蘭を横目に園子は携帯を取り  
出した

電話をかけた先は――――

鈴木財閥



「あ。パパ？新一君のニュース見た？うん。それで、どこの病院に搬送されたかわかる？」

米花中央病院？分かった。ありがとう！」

「蘭！新一君米花中央病院にいるって。タクシー捕まえていくわよ……！」

蘭が何か言うのを聞かず、園子は蘭の手をとり走り出した

## 十九話

何故、彼がこんなに苦しまなきゃいけないの

何も悪いことしてないでしょう？

何で貴方は、こんな所に、入っているの

出てきてよ…早く……出てきて!!

願っても、想っても、彼のいる部屋も、私も私の周りも何も変わら  
ない



数時間の手術を終え、赤いランプが消えた  
それが合図のように一斉に立ち上がる

手術室から出てきた医師に蘭が寄る

「先生！新一は…！」

「何しろ頭部からの出血がひどく…」

目の前が真っ暗になる

気持ち悪い。吐き気がする

まさか…

まさか—————

「ご安心ください。無事、一命は取り留めました。  
…しかし頭部からの出血がひどく…。もしかしたらこのまま目を覚  
まさないこともあるかもしれせん」

「え…。それって…」

「はい。覚悟もしておいたほうがよろしいかと」

そう言うと医師は一礼をし、その場を去っていった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3008y/>

---

未来へ

2011年12月24日10時47分発行